

「みなとパネル展」・「みなと座談会」の開催について

11月5日から7日までの3日間「ザ・シンポジウムみなとin函館」との共催行事として、「国土交通省函館開発建設部」「NPO法人北海道みなとの文化振興機構」の主催による「みなとパネル展」と「みなと座談会」を開催しました。

海・港・暮らしを地域で考える「みなとパネル展」は、市内デパート7階のアネックス催事場で開催しました。

入場者は、この3日間で親子連れを中心にして延べ950人に達しました。

会場は、終始和やかな雰囲気の中、港と暮らしの関わり合いというものを身近に考える有意義な場になったのではないかと感じました。

また、同じパネル展会場では、「みなとまちの魅力の再発見と新たな創造」と題した「みなと座談会」を約1時間半にわたって行いましたのでその概略をご紹介します。



みなとパネル展テープカット



みなとパネル展会場で楽しむ親子



「みなと座談会」

—みなとまちの魅力の再発見と新たな創造—

1. 日時 平成16年11月5日(金) 10時30分
 2. 会場 「みなとパネル展会場」(函館市棒二森屋7階)
 3. 出席者 折谷 久美子
(みなとまちづくり女性ネットワーク函館代表、暮らしを海と世界に結ぶみなとづくり女性ネットワーク事務局長)
佐藤 尚子
(港湾空間アドバイザー、全国女性ネットワーク会員、函館すぶれっと代表)
山形 敦子
(株)函館山ロープウェイFMいるかパーソナリティ、全国女性ネットワーク会員)
星井 英人
(社)函館青年会議所理事長)
高井 秀昭
(みなとから見た函館のまちづくりを考える会会員、(社)函館地方法人会青年部会元会長)
- (司会) 田中 敦幸
(NPO北海道みなとの文化振興機構理事)

田中 函館港は、1865年横浜港や長崎港と一緒に開港した150年の歴史を持つ港です。待望の新幹線は函館までの延伸が決まりましたが、函館はやはり長い歴史を持つ「みなと」が今後もこの地域の発展の核となりますので、今日のテーマは「みなとの魅力の再発見と新たな創造」ということにしました。

まず最初に、お一人5分程度お話を頂き、その後フリートーキングに移りたいと思います。佐藤様からお願いします。

なお、本日の座談会は、当NPOの次回発行の会報に報告しますが、紙面の都合上、皆様の第1回目のご発言は一部要約し、また、フリートーキングのご発言は、勝手ですが「テーマ」を設けて個人名は表示せず取り纏めますのでご了承下さい。

座談会(I) 各出席者の第1回発言

佐藤 港湾空間アドバイザーの佐藤です。2000年にDPIという世界障害者大会がありました。障害者の団体の大会でしたので、西部地区、金森倉庫とか向こうのところをバリアフリーでやったらどうなのかということで、ロシアの障害者の方と一緒に歩いたことが、こういう港の関係に足を踏み入れるきっかけになりました。景観的には金森倉庫が本当に姿見はすばらしいのですが、障害者の方、足の不自由な方や、車いすの方にはとても不便だということが分かり、函館市の港湾の方が、1メートルの幅で100メートルほど、夜中に平らにしてくれて、目地も詰めてくれて、すごく歩きやすくしてくれました。そういうことで、一般市民の私達が港というと、暗い、汚い、行くところではない、そういうイメージがあったのが、これからは港をもう少し自分達が行きやすい場所にするための行動をしなければいけないということになり、現在に至っております。

高井 私自身は、仕事も船舶に関係した電気のことをやっていますが、小さい頃から海の方には親しんでいました。しかし、最近、函館は北洋の船や連絡船がなくなって、イメージ的にもちょっと寂しさを感じています。そんな時、函館地方法人会に入り、ある方から誘われみなどを考える会に参加させてもらって、その中でいろいろな議論をしたり、函館の摩周丸保存・活用懇談会の委員をさせていただいたり、今、国際水産海洋都市構想協議会の事務局としてお手伝いしています。物流港とか作業の場としての港、中央埠頭から北埠頭の方になりますが、ちょっと憩える場所、癒される場所は、非常に少ないなと思っています。それを何とかできないかなという思いが今強くあります。小学生の頃、中央埠頭に魚釣りに行った時に、夕日の前をでかい連絡船が横切っていくという、そのイメージが今でもすごく印象に残っています。今の子供達がそういうものを見られないのが残念です。何か港の映像を子供の心に焼き付けることができないかなという思いで今は活動しています。

山形 FMいるかでパーソナリティをしております山形でございます。

港にかかわるようになったのは、函館空港のターミナルビルがまだ計画段階にあるときに、空港の景観検討委員会のメンバーとして2年ほどかかわって、それが終わった後に、今度は港湾の方にアドバイザーとして加わって下さいと言われたのがきっかけです。

全国的な組織の大きなシンポジウムとセミナーが富山県の新湊で開かれた時に、全国の女性達が自分達の地域の港をこんなに一生懸命考えていて、女性達が動き出していることにすごくびっくりしました。仕事上、FMいるかという地域のラジオ局のパーソナリティをしていますが、これだけ海に囲まれて、これだけ海の恵みを受けている私達が、実は海のことを何も知らないのではないかなという思いがずっとありまして、今年の4月から、北大海洋学講座という、1週間に1回、20分の番組をつくりました。そこで、北大の先生方に、海の中の生き物だとか、港が今どうなっているのかとか、ガゴメコンブがこんなに地域で注目されているぞとか、水族館の構想はこんなになっていますよとか、そういうことのお話をいただきながら、ではもっと海のことを知れば、海を大事にしようとか、海に出かけようとか、海のものを食べようとか、そういうきっかけになればいいなと思って番組の中でも取り上げています。

星井 社団法人函館青年会議所の星井と申します。

冬の恒例イベントとして定着してきたクリスマスファンタジーについてお話したいと思います。私は、2000年に青年会議所に入りましたので、98年からスタートしたこのイベントの始めたきっかけや苦労話を、聞いた話ですが、お話させていただきます。98年の理事長だった星野さんという方が、ホームアローンの映画のラストシーンに出てくる大きなツリーを見て、ぜひそれを函館にも立てたいと。函館は文化性の視点もあって、ロマンティックなまちだから、絶対クリスマスツリーが似合うだろうと考え、やるのであれば、冬期観光の目玉として、このクリスマスファンタジーを立ち上げようというのが一番最初のきっかけでした。

当時、何もないところからスタートするわけですから、まず木の手配をしなければいけない。木の手配は、城郭のサミットというのが、97年函館で開かれ、カナダのハリファックスの市長さんもいらしていたので、何のアポもとらず、宿泊先の国際ホテルを訪ね、何とかもみの木を1本いただけないかというお願いをした。市長にしてみると、即答はできませんので、持ち帰らせてもらいますということで、カナダに帰られた。その後、向こうで当然話題になり、青年会議所のメンバーが何人かで行ったらしいのです。議会にいきなり通されて、その場でこの件が議員に諮られて決定された。もらうようになったらどこに立てようかということがま

ず問題となった。一番最初は、道路の真ん中に立てようかと考えたが、大きなツリーなものだから、当然交通規制もしなければいけないのでだめにとなった。それで苦肉の策で、海の上ということになった。海だったら意外と簡単で、台船の上に乗るのであればかまわないですよということで、海に立てたのです。今年になってやっとオープンショップ、路面店、屋台みたいなものをあのエリアに出せるようになった。やっぱり最初にやるときの苦労というのは大変だったと思います。予算も、2,000万円くらいだ



「みなと座談会」の開催風景

ったのかな、メンバーで集めたらいいですね。今は4,500万円の総予算なのですが、市から1,600万円の補助ももらっています。それこそみんなで協力して、各団体、実行委員会組織でやっていますから、まち全体のイベントになりつつあります。日銀さんの試算によると、この経済効果は約10億円と言われています。10億円というと、約2万人ぐらいのコンベンションに相当し、また、青年会議所の全国大会が約10億円ぐらいの経済効果があるみたいで、それを毎年函館でやっているということになります。事務局は青年会議所でもっているが、大変です。だからもっともっと市民の方々に参加してもらえるシステムを構築しなければいけないなと思っております。

折谷 みなとまちづくり女性ネットワーク函館の折谷と申します。

こちらの会は、昨年7月に立ち上げたのですが、以前より山形敦子さん、佐藤尚子さんなどと一緒に、「暮らしを海と世界に結ぶみなとづくり女性ネットワーク」という会で活動しておりますので、少し説明させていただきたいと思います。全国組織の会で、港に関心のある女性が北から南までネットワークを組み、暮らしにかかわりあいの深い女性の視点で、港について行政の人や地域の皆様と一緒に、環境とか生活とか、いろいろ考え学習し、地域に合った魅力ある港づくりの活動をしていこうという会です。今年の9月から私は、この会の事務局長を担当させて頂いております。全国の女性ネットワークの会員となり、そして「みなとまちづくり女性ネットワーク函館」の活動をとおして、みなと町函館に住んでいながら、みなとに関して今まで知らなかったこと、気が付かなかったこと、わからなかったことがたくさんありました。また、今まで私が行ったことのある港の中でも、函館と似たようなみなとまちづくりの取り組みをしているところもありました。でも、気候風土が違いますので、全然風景が違ったり、感動が違ったりしました。そこには、その地域に住んでいる人達の顔が見えてくるような活動がされているように感じました。

これからもみなとまち函館に合った、函館の人が喜んで多くの人が足を向けてくれるようなみなとまちづくりを地域の皆さんと協力しながら活動していきたいと思っております。

田中 皆様から大変貴重なご意見やご提案を頂きありがとうございました。これからは本日の「テーマ」を中心に、将来の函館のみなとづくりやまちづくりについてご自由にご発言頂きたいと思っております。よろしく願います。

座談会(Ⅱ) フリートーキング

ご出席の皆様の第1回目のご発言を受けて、その後フリートーキングに移り、大変貴重なご意見とご提案等を頂いたので、私なりに次の「テーマ」に分類して、皆様のご発言の要旨を取り纏めました。

- (1) みなとまち函館の課題
- (2) みなとまちの活性化—提言
- (3) 緑の島の開発と運営
- (4) 国際水産・海洋都市構想について
- (5) 港湾計画への市民参加の視点

(1) みなとまち函館の課題

みなとには、市民や観光客に規制が多過ぎる。

最近、テロ対策とか騒音防止のため、埠頭の周りに頑丈なフェンスを回し、監視カメラを付けるなど、埠頭への出入を厳しく制限し、市民を港から遠ざけている。緑の島でさえ夜はチェーンでクローズされている。

また、市民にとって大変良い環境の函館港でも、漁業権で漁師の利益ばかりが優先されている。切角、海のもつ潜在的な魅力のみすみす逃し、観光資源にも活用されていない。

さらに、「クリスマスファンタジー」でもみられるようにクローズアップされてからようやく行政が動き出すなど、行政に積極性がない。

「青函連絡船と北洋漁業」に代わる港の自玉がない。

函館は、かつて「青函連絡船と北洋漁業」が市民の誇りであり、自慢の種であった。青函連絡船は人々の出会いと別離など多くのロマンを生み出し、北洋漁業は港に賑わいをもたらした。しかし、今はこれに代わるものがなく淋しい。

繁華街は何処かと尋ねられても答えられない。

かつての青函連絡船の基地で、市電のターミナルでもある函館駅前で、観光客に繁華街の場所を尋ねられても答えようが無いのは恥ずかしい。

(2) みなとまちの活性化—提言

「長崎のみなと」と函館

長崎のみなとを見に行ったとき、強い印象を受けた。電車を降りて歩いて2、3分のところにすぐ、**みなと**があった。歩道には、ヤシの木のような観葉植物が植えてあり、柵も無く、大変ロマンチックな雰囲気の中かで、夜の9時頃でも若いアベックや自転車などで気軽に立ち寄った学生たちが、ソフトクリームを食べながら楽しくベンチで談笑していた。周辺には、洒落た店やジャズが流れる飲食店など全ての店が海に面して並んでいた。

どの店も混んではいないが、それなりに賑わいがあった。市民や観光客がいつでも気軽に立ち寄れる憩いの場所が、みなとと一体となって電車を降りて直ぐのところにあった。

函館駅は、海にも面し、市電も通っていて長崎と似た条件にあり、この地区全体のあり方を考えるのに「長崎」は一つのモデルになると思う。

函館駅を中心とする観光ルート（案）

函館のみなどの最大の観光スポットは、誰が考えても函館駅前から緑の島と西部地区を結ぶ一帯であり、今後、これらをどのように結びつけるかが課題となる。

これについての皆様のご意見を総合すると次のように集約される。

「まず、函館駅から歩いて青函連絡船記念館摩周丸に行く。ここから水上バスに乗り、海からの景色を味わいながら緑の島に行き、自然を楽しむ。さらに時間があれば港内を船で周遊し、興味のある埠頭に立ち寄る。その後、元の函館駅前に戻り、今度は電車に乗って西部地区に行き、函館のレトロなまちの雰囲気を楽しめる。」

これまで函館観光というと、教会郡とか五稜郭などの歴史的な建築に依存していたが、もう既存のものでは飽きられてきた。これからは海と港の観光に舵を切り、青函連絡船や北洋漁業の時代に負けない賑わいとロマンを取り戻す必要がある。

恒例の冬のイベント「クリスマスファンタジー」は、函館の一大イベントに成長し、雪の降る夜は一段と神秘性が増す。ただ会場周辺の商店が意外に早く店を閉めるので、市民や観光客が冬の夜長を楽しめるように、金森倉庫郡の飲食店や周辺の商店の協力が強く要請されていた。

(3) 緑の島の開発と運営

5,000人規模のコンベンションホールが欲しい。

函館まで新幹線が開通すれば、青森と函館は30～40分で結ばれる。人口30万人の函館と同じ人口の青森が合併すれば60万人都市となり、政令都市に発展する。

函館は、これから学術研究都市として、また、ロマンがあって大人が集うまちとして内外に売っていているので、5,000人が入る規模のコンベンションホールが絶対必要である。

コンベンションホールは緑の島につくるのが適切である。函館山から見た景観の問題等が提起されているが、いろいろ工夫すれば解決できるし、また経営面では、単体で赤字経営でも、集客による派及効果を考えれば函館市全体で十分採算がとれる。

水族館への思い

水族館の問題は古くて新しい課題である。

新しくつくる水族館はただ見せるための施設ではなく、「津軽海峡」をテーマにしてはどうか。例えば函館を代表する魚はイカであるが、これをただ見せるだけではなく、イカの生態、イカの大群が透明になって美しく泳いでいる姿を見せるなど、函館の海について学び研究する場にしてはどうか。

さきほど、「クリスマスファンタジー」の話で、一人の「思い」が周辺の人を動かし、みんなの子供への思い、海への思いが実を結んで実現できたということであった。水族館の構想も専門家の北大の先生の他、商工業界を含め市民各戸の方々の意見を吸い上げてまとめることを要望したい。来週8日の「ザ・シンポジウム みなとin函館」で基調講演される新江ノ島水族館館長、堀先生のお話は、貴重な「モデル」となる。

(4) 国際水産・海洋都市構想について

長期的視点と着手のタイミングが重要

今、函館市と経済界は最重要課題として「国際水産海洋都市構想」の策定と実現に向けて取り組んでいる。

計画の策定に当っては、函館としては150年のみなとの歴史を経て、次のものに取り組むのだから、一過性のものでなく、20年、30年先を見据えた長期的な視点で検討し考えなければならない。

一方、新幹線が函館まで開通すれば、プロジェクトの内容によっては青森側と競合し、さらに新幹線が札幌まで延長されれば、函館が置き去りにされる恐れもある。

したがって、具体的な各プロジェクトの着手の時期については、適格な判断が求められる。

大学による市民講座の拡充

函館には北大の水産学部があり、先生方や学生が一般市民を対象に講座を設けたり、学内を案内して大学の研究などを公開している。北大は札幌では月に1回定期的に開いているが、今後函館でもこれらの市民講座の定例化や北大以外の他大学への拡大も進めることを提案する。

国際港函館は、子供達にとって生きた学習の場である。

子供達にとって、「函館のみなと」には、郷土を学習するための教材があふれている。一例を上げれば次のようになる。今函館港では外貿コンテナターミナルが建設中で、近く供用開始される。このターミナルが完成して、外貿コンテナ船が入港すると、コンテナターミナルでは、クレーンやトレーラーなど荷役機械が忙しく動き回り、コンテナの船への積み卸し作業が行われる。外貿コンテナには長さ20フィートと40フィートの2種類あって、カラフルでいろいろと英語で書いてあり、また、荷役機械も原色で美しく塗装されているので、荷役作業は一枚の絵になり見ているだけでも楽しい。さらに「コンテナの中には函館でとれた魚貝を詰めて、あの船で上海に輸出され、中華料理の材料となる」などと説明すれば、子供達にとって地域の産業や物流についての生きた勉強になる。また、あの大きなコンテナ船はシアトルを経てバンクーバーに行き、このコンテナ船はシンガポールに行くなどと説明を受ければ子供達の夢は大きく膨らむ。

(5) 港湾計画への市民参加の視点

マリーナも市民みんなで計画する

我が国のマリーナは、殆んど個人所有のモーターボートやヨットなどレジャーボートのための施設と考えられてきた。例えば、小樽港のマリーナは個人のレジャーボートであふれているが、港のなかで最も優れた立地条件にありながら、一般市民や観光客は皆無で、既にレストランを持つクラブハウスは閉鎖された。

しかし、オーストラリアにあるマリーナでは、遊覧船やレンタルボートの桟橋も設備され、70店のブランド店や10店のレストランがあって市民や観光客で賑わい、レジャーボート所有者も一緒に楽しんでいる。

マリーナの例は港の景観づくりへの市民参加を促す一つの視点を示唆している。

フェリーターミナルを集約し、新たな賑わいの拠点に

函館港では、フェリーの運航会社がそれぞれ独自にターミナルをつくり使用している。一般に、フェリーは多くの市民や観光客が利用するので、ターミナルは市民と観光客との交流場所ともなり一つの賑わい空間が形成される。したがって、港の中心部にフェリーターミナルを集約するなど、市民の視点でフェリーターミナル計画を見直したらどうか。

おわりに

この企画を実施するに当たりましては、現地でこの取り組みを支えてくれました応援スタッフ一人ひとりの暖かい気配りと工夫、そして時節柄ご多忙な中から社員を派遣してくれました会社のご協力に深く感謝し、お礼申し上げます。

今後とも港と暮らしの関わり合いが、地域の生活文化として広く浸透していくよう努めてまいりますので、会員皆様のお一層のご指導ご協力をお願いいたします。

「ザ・シンポジウムみなとin函館」の開催について

11月8日、函館市において、港を中心としたまちづくりを考える「ザ・シンポジウムみなとin函館」（ザ・シンポジウムみなと実行委員会主催）が開催され、函館市を中心に全道各地から約370名が参加しました。本シンポジウムは地域の発展の核となる港湾の方向性について様々な立場から議論し、港湾の重要性を広くPRすることを目的としており、本年度で12回目の開催となります。

基調講演では、新江ノ島水族館館長の堀由紀子氏が「水産・海洋都市とまちづくり」と題して講演を行い、「函館市の進める『函館国際水産・海洋都市構想』は他の自治体のモデルとなる素晴らしい構想である。」と述べ、構想推進の必要性を強調しました。

パネルディスカッションは、北海道新聞社論説副主幹の江尻司氏がコーディネーターを務め、「国際海洋都市函館とみなと」のテーマで意見を交わしました。

函館商工会議所青年部会長の大桃泰行氏は「海外からの観光客は増えているが、まだ整備が不十分。滞在型の観光都市を目標とした整備が必要。」と述べられ、はこだて未来大学の長野教授は「教育、調査、研究の中核となる基盤整備が不可欠。」と述べられました。そして最後に、函館市長の井上博司氏は「函館港を国際水産・海洋都市構想の核として、学術研究と観光を融合させたまちづくりを進めたい。」と締めくくりました。



パネルディスカッションの様子

お知らせ

平成16年7月27日、道東地域の産業活動を支える釧路港とその周辺施設の利用状況を、親子に肌で感じてもらうことを目的として行った「親子で行くみなと学習見学会」の開催模様を、日本港湾協会発行の「港湾」10月号（平成16年）でご紹介しております。

また、同じく「港湾」1月号（平成17年）では、平成16年11月8日「寒地港湾技術研究センター」などで構成する「ザ・シンポジウムみなと実行委員会」が主催する「ザ・シンポジウムみなと in 函館」の開催模様と共催事業（国土交通省函館開発建設部・NPO法人北海道みなとの文化振興機構主催）として行った平成16年11月5日～7日で開催した、海・港・暮らしを地域で考える「みなとパネル展」や同月5日には「みなとまちの魅力の再発見と新たな創造」と題して函館市のまちづくりを実践してきた活動家5名による「みなと座談会」の開催模様をご紹介します。